「被爆体験談や平和への思い」応募用紙

記入日 平成26年（2014年）[redacted]月[redacted]日

ふりがな イナガキ ショウゾウ 氏　名 稲垣昭三 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	生年月日・年齢 [redacted]
現住所・連絡先 〒[redacted]	
電話 [redacted]	FAX [redacted]

（聞き取り代筆した方の連絡先）

ふりがな 氏　名 ※　氏名の公開の可否（ 可 ・ 否 ）	電話（　　）　－ FAX（　　）　－

※　上記に記載された個人情報の取り扱いについては、広島市個人情報保護条例に基づき、平和宣言の作成、被爆の実相を伝える資料としての活用及びこれに付随する事務連絡のみに使用し、御本人の同意なく第三者に提供しません。

（被爆当時の状況）

当時の年齢	17 歳	性 別	男 ・ 女
当時の職業・学年等（できれば具体的な勤務先・学校名等も御記入下さい。） 広島師範学校本科1学年 在学 学徒動員中で学校の中島輸送にて被爆 帰り登校 一日の予科練の整理等を行い 来週の一日の学校に帰える その後学校内の整理 市内のケガ人 原爆の悲惨さの中 9月末まで 10月から少し休みとなり 田舎に帰える 二度と経験したくない 原爆の恐ろしさは 心に残る 平和の為に尽くす			

※　被爆当時の状況については、平和宣言に盛り込む際や被爆の実相を伝える資料として活用する際等に、公開します。

※　この応募用紙に、被爆体験談（様式不問）を添付してください。

※　提出された書類は返却いたしません。

ふたたび被爆者を作るな

「被爆者の証言」

大坂剛三

二〇〇九年八月六日

ふたたび被爆者をつくるな

「被爆者の証言」

大坂剛三

私達は小学校四年生から、中級生として連日出征兵士を村はずれの三叉路まで見送りに参加させられました。

勝ってくるぞと勇ましく誓って国を出たからは手柄たてずに死なれよか

軍歌を歌って見送ることが毎日の仕事のようでした。意味もわからずに大声で軍歌を歌いながら行列の後のついて歩きました。高学年になると太鼓をたたいて見附駅まで見送りの行進をしました。

子供だった私は、伯父さん達の出征者をただ見送っていただけで、大人の気持ちを推しはかったり、何のために出征するのかなど考える力もなく、その必要性すら感じませんでした。

赤い紙に「右のもの招集する」ただ一言で

した。私の家にも二番目の兄に天皇の名で令状がきました。母は「我が家には男の子が三人もいるんだから、一人くらいお国のためにならないと世間に顔向けができない」と喜んでいました。我が家にも「誉の家」と書かれた札が玄関に下がりました。

続いて、結婚してわずか三ヶ月だった長兄にも招集令状が来ました。この時の兄嫁の気持ちを察するに、むごく非人間的な悲しい別れであったと思います。

私が一九歳で招集されたとき母は「召されすぎだ」と言いました。出征の日、玄関に姿を見せずに奥の部屋で座ったままじっと下を向いていました。

憲法（大日本帝国憲法）とは恐ろしいものです。この現実を当時の国民は当たり前だと思っていたのです。日本の国は永い永い戦争を続けたのです。兵隊を見送った子供が、一九歳になり、我が家の男子全員が招集されてしまったのです。

終戦の年一九四五年四月、私は広島皆実町にある暁一六七一〇部隊船舶通信隊に入隊しました。同時に厳しい訓練が始まりました。日本の軍隊は天皇の軍隊であり、上官の命令は天皇の命令であって絶対服従を強いられました。私は初年兵でしたから下がなく、自分以外の全てが上官でした。銃の弾倉の上には天皇家の菊の紋章が付いていました。銃だけではなく通信器機や日常必需品までもが天皇からの預り品とされ、員数不足や手入れ不十分などがあったりしたら、それはもう上官による言語に絶するしごきが待っていました。こうした理不尽な訓練によって普通の若者が物言わぬ兵隊になっていきます。憲法とも教育とは恐ろしいものです。国民を盲目にしてしまうのです。

八月五日の夜は、広島市内に空襲警報のサイレンが一晩中鳴り続けました。睡眠不足と過労でへとへとでした。私たちの第一中隊は、六日の午前中だけ就寝許可が出て兵舎で眠っ

ていました。

ピカッと天空を切り裂く鋭い閃光が走り、その瞬間にブルブルと体中に電流が流れるような激しいショックで目が覚めました。兵舎は崩壊し、無我夢中でした。暗闇の中、腹這いになってようやく戸外に出ました。熱風と共に竜巻のように埃が舞い上り、一寸先が見えませんでした。五里霧中とはこのことです。

何がなんだか分からないままたずんでいると、誰かが「比治山に退避、比治山に退避」と叫んでいました。

比治山の洞窟の中には第一中隊の通信機械が保管してあり、私は訓練のたびに行っていたので、幸い比治山周辺の地理を熟知していました。辺りは真っ暗で、爆風が強くて立って歩けないため、じかたなく四つん這いになって比治山に向かいました。

兵舎の裏門を出ると目の前に比治山があり、街はずれの公園になっていました。なんとか這いながら辿り着くことができました。

目の前の砂塵が薄れてゆくと、周囲が少しずつ明るくなって物が見えるようになりました。私は仰天しました。両足の皮膚がただれて剥がれ落ちているではないか。

しばらくして冷静になって気がつきました。前方にあるはずの巨大な兵舎が跡形もなく消えていました。まったく信じ難い光景で、夢でも見ているようで茫然自失の状態でした。

小高い比治山から広島の方を見ると、市街は見渡す限り建物が破壊され、発生した火災が異常な速さで拡大してゆくのが見えました。街のあちこちで燃え上がっている炎を見て容易ならぬ事態になったと実感しました。

就寝許可のなかった中隊は朝の点呼中だったはずです。しばらくするとみんなが山に向かってすすんできました。

「兵隊さん」「兵隊さん助けて」と泣き叫ぶ市民の行列が続きました。子供や大人、老若男女を問わずみんなが男女の判別ができないほどの大火傷をしていました。「助けて」

と言われても私は立って歩くこともできず、尻をついてヅルヅルと両手を使って移動する状態で、どうすることもできませんでした。この世の地獄絵、目の前の人たちをただ見ているだけで思考力はゼロになり、放心状態でした。

やがて山は続々と逃げてくる被爆者で埋まりました。被爆時は、ほとんどの子供は夏休みで屋外で遊んでいたし、四年生以上の小学生は建物疎開作業で外にいた時間帯でした。

皮膚がタダレ落ちて腰のバンドのところでグチャグチャになって固まっている人、目玉が飛び出している人、屋根瓦で頭が切れて顔が鬼の面のようになっている人、人間とは到底思えない生き地獄でした。

当日は比治山に野宿しました。日が暮れると水を求める被爆者の悲痛な声がし、その声がだんだん小さくなり、やがて静かになると息を引き取っていきました。あれほど欲しがっていた水を一滴もやれなかったあの日のことを思うと、今でも心が痛みます。日頃市民が憩いの場としていた比治山は目を覆う地獄の山に変わっていました。私は尻をついて救援隊を待つしかありませんでした。夜になった広島の市街は凄い炎が渦巻き、夜空を赤々と染めていました。この猛火は翌日に黒い雨を降らしました。

二日目の昼になっても広島の市街にはまだ黒煙が立ち上がっていました。比治山は、末期の水すら飲めずに息絶えた人、何とか生きているものの空しく死を待っている人、被爆者の群れで山は溢れていました。夜になると不気味な静寂に不安が増し、生きる気力さえ失われてゆきました。

三日目の朝ようやく救援隊のトラックがきました。私は一番車に乗せられ臨時野戦病院（仁保国民学校）に収容されました。

校舎に入ると正視できない惨状に足がすくみました。救護所とは名ばかりで死者の収容所となっていました。校庭、体育館、上下教

室の床上に、大火傷を負って虫の息の被爆者が、手当もされずに放置されていました。天を向いて倒れている人、うつ伏せで丸太のように転がっている人の中に、怪我人や死体が次々と絶え間なく運ばれてきていました。

「この子を茶毘に付してください」と死んだ子を背負って泣きながら訴える母親がおられました。茶毘を待つ死体は勿論、生きている人の目玉や鼻の穴からウジ虫（ハエの幼虫）が這い出していました。我が子、我が家族を探し求める人たちが押し寄せていました。

裏の畑では、茶毘に付される人の青い火が怪しく揺らいでいました。犠牲になった人は人間扱いされず、不用になった物品のように扱われ、焼却されていました。

私の傷は消毒兼傷薬の赤チンキを塗布するだけでした。2〜3日すると乾いて表面が固まりました。中が化膿しているのでカサブタを剥がし、またチンキを塗ります。この時、飛び上がるほどの激痛が走ります。治療はその繰り返しです。

市街地から来た人が話していました。黒焦げになった電車の中に、黒焦げになった乗客が累々と折り重なっていたそうです。また、市内を流れる元安川は、身を焼く焦熱地獄のために川に飛び込んだ死体が、パンパンに膨れて川面を覆っていたそうです。潰れた屋根の梁下で必死に助けを求めている人を見捨て逃げてきた人が、涙を流して悔やんでおられました。自分の命だけを抱えてひたすら逃げるしかなかったのでしょう。

日本はどうなるのだろうか。故郷の親父やお袋は大丈夫だろうかなどどおかしなことばかりを考えていました。

たった一個の爆弾で大都会広島の市街が一瞬にして壊滅しました。「跡地には一〇〇年間草木も生えない」「被爆者は結婚しても子供ができない」などど噂されました。当時の日本人は「ウラン爆弾」「プルトニュウム爆弾」「原子爆弾」などという新型爆弾の存在

や知識は全くありませんでした。八月九日に同じ爆弾が長崎に投下されたとラジオのニュースで聞きました。

私は「原爆は人間が犯した許されざる罪だ」と叫びたい気持ちでいっぱいでした。

八月一五日正午頃「忍び難きを忍び・・・」という天皇のラジオ放送を聞きました。目の前の屍の山、治療も受けられず空しく死を待つ人にとって「忍び難きを忍べるか」との思いでした。ただ冥福を祈るだけでした。

生き残れた人も生涯死と向き合って生きることになります。神仏にすがって生きる人がいます。神仏を否定して生きる人もいます。みんなあの日を境に心と体に受けた傷を背負い、生死の狭間で生きることになりました。

「あの日は人間性回復の原点になる」と言われていますが、あまりにも大きな代償を払ってしまいました。

広島は傷病者にとっては極めて環境が悪かったため、私はやけどの治療がおもわしくなく、脱毛と体調悪化がひどくなり、八月二六日に宮島へ移送されました。宮島は環境が良かったので枝を使って歩けるようになりました。

九月八日除隊の命令が出て帰郷することになりました。見附駅まで父親がリヤカーを引いて迎えに来てくれました。帰宅後町医者に二ヶ月ほど通院しました。結果は良好でしたが、今でも長靴を履いたり、寒い冬の季節になると赤く腫れます。

長兄は戦死しました。「レイテ作戦ニ参加シ戦死セリ」との公報があったのは終戦後四年も経ってからです。招集の時も戦死の時も一枚の紙のみで、人間扱いではありません。

大東亜戦争で三百万人余兵士が戦死しているのに、祖国・故郷に帰ってきた遺骨は一五〇万人余しかありません。自民党の大物が遺族会の会長をしておられますが、早くなんとかしてほしいものです。

戦没者を慰霊し平和を守る会（NPO法人）

によると、戦死者の遺骨はかっての戦場に放置されたまま、草に埋もれ祖国への帰りを待ちわびているとのことです。私も遺骨収集団に参加したいのですが、八四歳の老体では無理のようです。一国の軍隊とは、何があっても国民の生命と財産を守ってくれるものと信じていたのに、こんな大切な戦後処理もせずに経済大国とはどういうことでしょうか。

戦争には勝ちも負けもありません。あるのは滅亡だけです。当時は日本中が空襲で焦土と化して生きるか死ぬかの状態で、沖縄に鬼畜米兵が上陸したと聞いてもそこまで気が回りませんでした。やがて本土は復興を遂げ繁栄を謳歌し、沖縄は忘れ去られました。もし「正しい戦争」「正義聖戦」などというものがあるとするなら、正しいテロもあることになるでしょう。

私は大正に生まれ、昭和を生き、平成で挽歌を歌うことになります。昭和の初めは生活苦と過酷な軍隊生活を体験し、二〇年代、三〇年代は極端な食糧不足で飢餓の時代でした。私は日本人が二度と戦争をせずに真の平和を享受するために、平和憲法を守り、自分を偽らず、正直に生きていきたいと思っています。でも、あまり長生きをするとまた戦争に出会うような気もします。

二〇〇九年

この世で一番怖いもの

悲しいもの

そして腹の立つものは

戦争であるとずっと思ってきた。

勝った方も負けた方も人が死ぬ。

何十年経っても

涙がこぼれる。

悲痛な思い出。

戦争は人間が人間でなくなること。

一瞬で地球全体を巻き込む核戦争の恐怖

大坂剛三

二〇〇八年八月六日

一瞬で地球全体を巻き込む核戦争の恐怖

今、もし世界のどこかに核爆弾が落とされたとしたらどうなるだろう。

四・三キロの範囲で一戸建てが姿を消して、ビルが骨格だけとなるだけでなく、その煉瓦やモルタルは時速何百キロもの速さで飛びかい、人間の体も建物から吸い出されて時速一六〇キロで吹き飛ぶという。

肺や鼓膜は気圧で破裂し、八〇キロ範囲で閃光を見た人は一瞬で全盲になる。熱が酸素を吸い上げるために窒息する。

今の核爆弾は広島に落ちた爆弾の七十七倍の威力がある。

この後生き残る人がいたとしても放射線に被曝し、疫病が蔓延し、太陽光線が大幅に遮断されて低温に苦しみ、気温が回復してからはオゾン層の減少によって太陽光線が強烈になるのだ。「ぞっとする」

日本の軍事予算が世界第五位であり、北朝鮮脅威論のもとで、アメリカが日本に核兵器生産の合法化を迫っている。

ミサイル防衛システム共同開発のための覚え書きに調印済みである。防衛システムの実態も恐ろしいものだ。

ミサイルを発射されても迎撃できるのだから大丈夫などと思っているととんでもない。核兵器を積んだミサイルを、発射直後あるいは大気圏再突入時に迎撃した場合は、約五〇キログラムのプルトニウムが人々の上に降り注ぐ。

化学兵器が積まれていた場合、それがばらまかれる。

直下にいる人だけではない。風に乗って地球全体に拡がるのである。

現代の核戦争とは、いかに防衛手段があろうと一瞬で地球全体を巻き込むものなのである。敵も味方もない。

被害拡大がないようにと宇宙空間で核兵器を用いて迎撃すると、今度は電磁放射線によ

って地上の電子システムが破壊される。

アメリカはなぜ核軍事システムを手放さないのか。それは合併を重ねて巨大企業化したロッキード・マーチン社を筆頭とする、ごく少数の軍需企業が政治を握っているからだ。日本も今までの戦争で一握りの軍需企業が富を得たのである。狂気の核武装を志向する日本の政治家の発言に危機感を抱く。

この一年間に死亡または死亡が確認された広島の被爆者五，三〇二人。計二五万八，三一〇人になった。被爆の影はいつもつきまとっている。

今日八月六日午前八時一五分、広島被爆六三年。平和式典遺族代表の六年生の男女二人の平和の願いを聞いて、嬉し涙が出た。

（年のせいか涙もろくなった）

二〇〇八年八月六日

大坂剛三

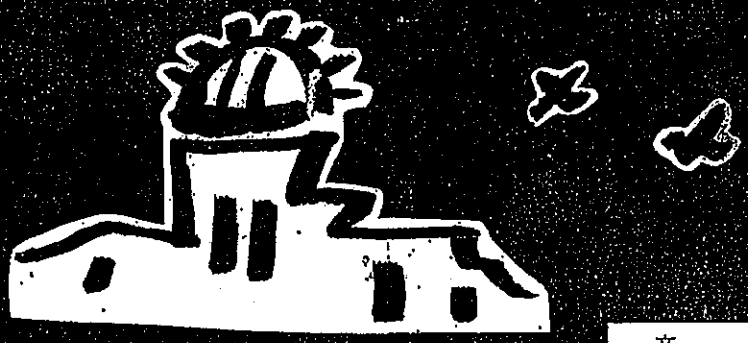
ヘレン・カルディコット著

（ミグリアーチ慶子訳）参考

著者は小児科医であった。アメリカのスリーマイル島で原発事故が起きた次の年、医師を辞めて核兵器開発を停止させる運動の先頭を切るようになる。

フランスによる大気圏核実験の停止。オーストラリアによるウラン鉱物輸出禁止など、その運動の成果が現実に実を結んだ偉大な人物である。

小河内の原爆



文　昭和49年度
資料；原爆の記録
「あの日わたしは」
安佐明治青年大学
安佐公民館

絵　下田　利津子

小河内の原爆

これは、昭和四十九年安佐公民館で安佐明治青年大学が開講されていた時、原爆の記録を書き残そうと「あの日わたしは」と題して綴られていたものです。

その中から小河内の[redacted]さん、[redacted]さん、[redacted]さん、布の[redacted]さんの手記を参考に製作しました。

他に大竹秀男さん、[redacted]の話しものせました。

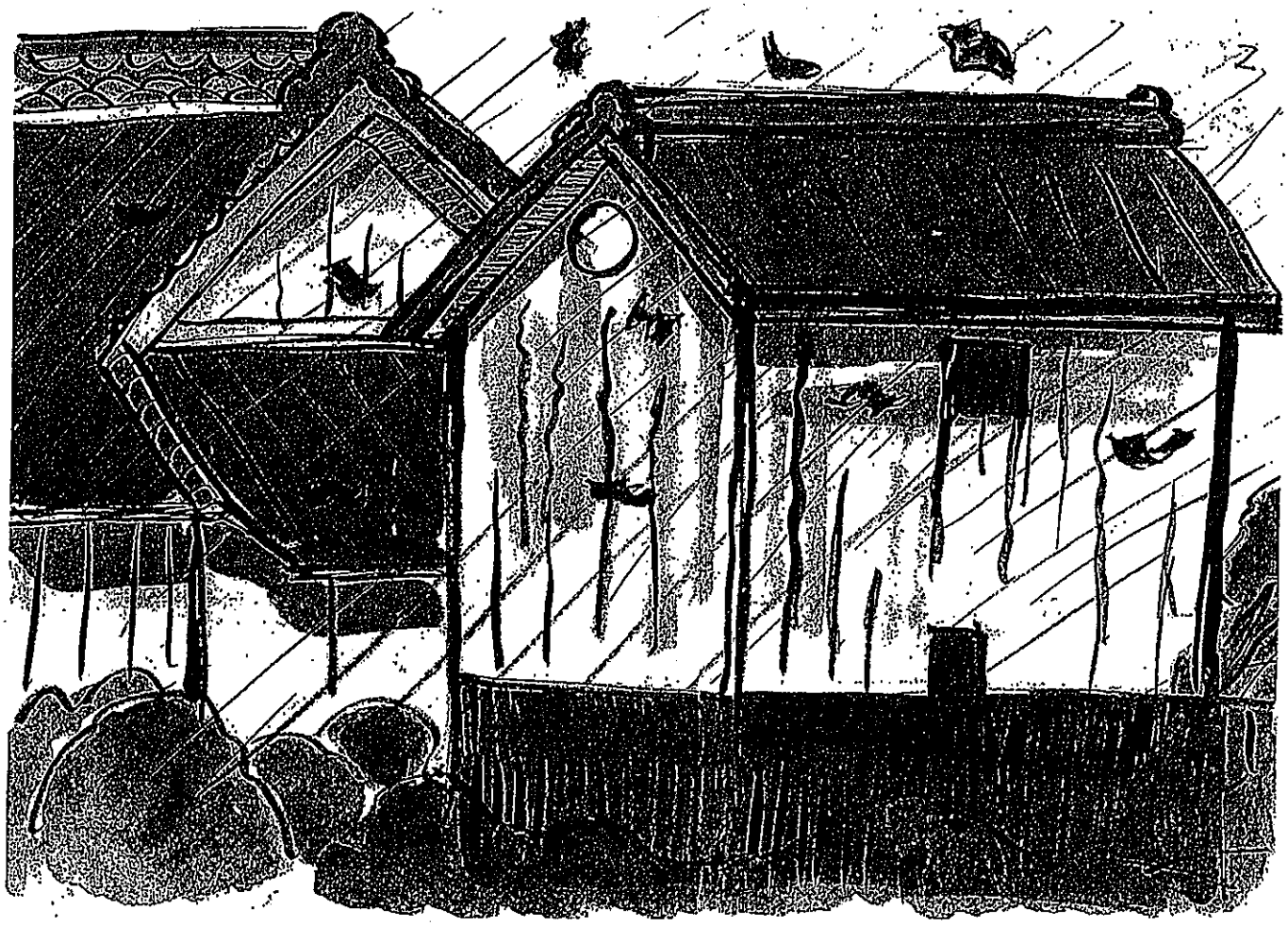
①

きのこ雲

[redacted]さんは洗濯をしていると、大きな物音がしたので外へ出てみると変な雲が立ち上がっていた。「可部の方かの」「高田かの」「広島でしょうかの」雲は赤く、白く、黒く「ただ事ではない」と思った。

[redacted]さんは夜明けと共に部落の人と松の油（飛行機の油にする）を取りに回り、田の水を見に行った。目が暗むような稲妻と大爆音がし、軒下へ駆け込んだ。南の空を見ると黒い雲がモクモクと上がっていた。「可部がやられた」「祇園だ」と言いながら呆然と見ていた。

[redacted]さんは畑の草を取りに行くと「ドカーン」とものすごい爆音がした。老父母は仏壇へ手を合わせ、念仏を唱えた。あまり遠くではない。「間の平野発電所だろうか」と話した。



②

黒い雨

空を見れば、黒い蝶のようなものが風に吹かれて飛んできた。紙やふすまの切れ端、木片が飛んできた。

十二時ごろから、灰やゴミの混じった黒い雨が夕立のようにはげしく降りだした。雨は点々と黒い斑点を残した。

新型爆弾の恐ろしさを知らされたのは夕方近くだった。

安否を気づかって探しに行く人、わずかな縁を頼って来る人、静かな山間の小河内は、騒がしくなるいっぽうだった。

③

七日、市内の様子

大升秀男さんは当時十六歳。軍隊動員で七日に広島へ入った。まだまだ焼け放題、脇の山へ燃え移っていた。電柱が倒れていて歩けなかった。田舎の奥、可部、三入、小河内の学校へ、どこの誰だかわからない人をどんどん運んだ。「水をください」「助けてください」「どなたか…」とうめき声と、念仏の声が続いていた。

川の水を汲んであげるとコロッと亡くなった。普通なら汗となって出るが、出場所がなくふくれ上がる。水をあげてはいけないと言われた。

布の[redacted]（[redacted]のお父さん）は一番の列車で広島へ行った。横川の駅で見た時びっくりした。家が一軒もなく広島駅、江波、己斐、宇品も一望できた。所々銀行など洋館の建物が4～5軒　煙っていた。